

# \*フェアトレードな生活\*

—その4—

フェアトレードとは、海外の生産者がつくったものを公正な価格で買い取り、生産者の自立を図る新しい貿易のカタチ。“生活のなかの国際協力”を実践されている方をご紹介します。



桑野友佳(くわの・ともか)さん 東京都渋谷区

「苦味や酸味などの刺激がそれほど強くなく、ブラックでもすごく飲みやすい。夏の暑い時期にもさわやかな味わいです」。この6月に発売となった東ティモール産ピースコーヒーのドリップバッグ。初めて飲んだときの感想を、そう話してくれました。お湯を注ぐとき、忙しくても時間をかけてじっくりと蒸らすのが、十分に味を引き出すコツだそうです。

新興IT企業ガイアックスに勤める桑野さんは、会社の給湯室にこのドリップバッグを置いて、同僚にも試してもらいました。クセのない味だけでなく、従来のピースコーヒーでおなじみの縁地に素朴な文字と鳥の絵をあしらったパッケージデザインも好評だったとか。「『フェアトレードって何?』という会話が自然に生まれて、フェアトレードを知つてもらうきっかけにもなりました」

ガイアックスでは今年、社長がお世話になっている方々へのお中元として、このドリップバッグを贈りました。毎年、品物を選ぶのに迷うそうですが、「生産者の支援につながるフェアトレード商品なら、贈った相手の方だけでなく産地のみなさんにも喜んでいただける。お湯を注ぐだけで手軽に飲めるのも、ギフトとしては便利ですね」。

これまでフェアトレードという言葉は知つても、意識して選ぶことはなかったという桑野さん。「オフィスコーヒーという身近な形でフェアトレードに触れるのは、自然でいいと思います」

PWJでは、オンラインの「ピース ウィンズ・ショップ」などを通じて、フェアトレードに取り組んでいます。  
収益は、PWJの活動に役立てられます。 <http://www.peace-winds.org/shop/>

## 支援地レポート



断熱板を使った更衣室の組み立て作業



柏崎小学校の校庭に立てられたバルーンシェルター

### 新潟県中越沖地震 緊急報告

7月16日午前10時13分ごろ、最大震度6強を観測する「新潟県中越沖地震」が起きました。PWJは同日、緊急支援用大型テント「バルーンシェルター」などをトラックに積み、スタッフ4人を被災地へ派遣しました。17日には被害の大きかった柏崎市の柏崎小学校の校庭にバルーンシェルターを設営。その後、たたみ状の発泡質の断熱板約1000枚を床敷きとして同市や刈羽村内の避難所に配布するとともに、断熱板を組み合わせた更衣室6基を設置しました。今後は、コンテナハウスをレンタルで調達し、被災家屋の後片付けの際に必要となる家財道具の一時保管場所を提供する予定です。（情報は、7月30日現在）※メディア掲載報告に関連記事

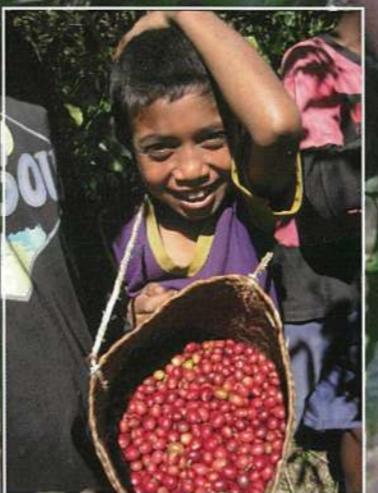


PWJが配布した断熱板を床に敷き詰めた避難所

支援のプロを、  
世界の現場へ



—コーヒー産地・東ティモールはいま—  
**独立5年後の果実**



いつもの年だと収穫が最盛期を迎える時期だというのに、7月に入りても、東ティモール・レテフォホのコーヒー農園は静かだった。コーヒーの実がさっぱり色づかない。そのうえ実の数も極端に少ない。収穫時期の大幅な遅れは前年のエル・ニーニョ現象の影響、実りが少ないので今年が裏作の年にあたっているのと、雨が少なかったためだという。収穫の不安定さは、独立から5年を経たこの国の足取りとも重なって見える。

長い独立闘争や、圧倒的多数が独立を支持した住民投票後の混乱を経て、東ティモールが「21世紀最初の独立国」になったのは2002年5月。駐留していたPKO（平和維持部隊）や多くの国連機関職員も早々に撤退し、“復興のモデル”と思われていた。しかし2006年春に表面化した国軍内のあつれきは、出

身地域をめぐる住民間の騒乱に拡大。国の基盤の弱さをさらけ出てしまった。

7月下旬、ようやく待ちに待った収穫期が訪れた。レテフォホの山には、例年のように、赤く熟した実をていねいにつみ取る農民たちの笑顔があった。彼らも地道な努力を続けている。豊作と不作のギャップを少しでも埋めるため、PWJの指導を受けながらコーヒーの木を植え替え、農園全体を若返らせようという取り組みを進めている。PWJにコーヒー豆を売るだけではなく、生産者組合の自立に向けた歩みも始まった。

こうした積み重ねはやがて、平和で安定した国をつくることに結実するだろう。そのときもレテフォホの山にはコーヒーの赤い実が揺れているに違いない。

## 自立へ進む生産者組合「カフェ・タタマイラウ」

東ティモール・レテフォホでPWJとともにコーヒーの品質向上に取り組んでいるのが生産者組合「カフェ・タタマイラウ」。2003年に10世帯からスタートした組合には現在、233世帯が参加しています。

課題は、収穫したコーヒーの果実（コーヒーチェリー）の精製から輸出までの手続きを組合メンバー自身で行い、一つの組織として自立していくことです。事務手続きや会計処理に不慣れな彼らにとっては、高品質コーヒーの生産と同じく難しい課題です。

今年は収穫量の落ち込みも懸念されますが、そんななかでも日本の消費者の信頼を失わないよう品質を維持することは欠かせません。コーヒ

一豆のコンテナが日本に向けて首都のディリを出港するまで、緊張と心配の日々が続きます。組合のリーダーたちにこの緊張感を伝えていることも今年の目標の一つです。



生産者組合「カフェ・タタマイラウ」のロゴ

## 地域に広がる野菜づくり

PWJがJICA（国際協力機構）の協力で進めるコーヒー生産者支援事業では、コーヒーの品質向上とともに野菜栽培技術の普及にも取り組んできました。組合メンバーの多くはコーヒーに依存して限られた現金収入から野菜を買うため、栄養が偏りがちになり、不作の年などに栄養不良になる人も少なくなつたため、野菜づくりを広める目的です。

実際に多くの種類の野菜を育て、地域にあった作物や栽培方法を検討した結果、マメ科の植物が土壌の改良にもつながって効果的なことがわかりました。もちろん有機農法で、堆肥にはそれまで捨てていたコーヒーの果肉や殻、家畜の糞を利用しています。

事業5年目の今年は、組合の18あるサブグループすべてが雨期の終わりを機に野菜づくりを始めました。担当の東ティモール人スタッフが連日、各グループの畑を回って指導し、毎日の草むしりや害虫の除去は、子どもたちも大人をまねて楽しみながら手伝っています。コーヒーが裏作の今年は、野菜の販売による収入が家計を支えることも期待されます。

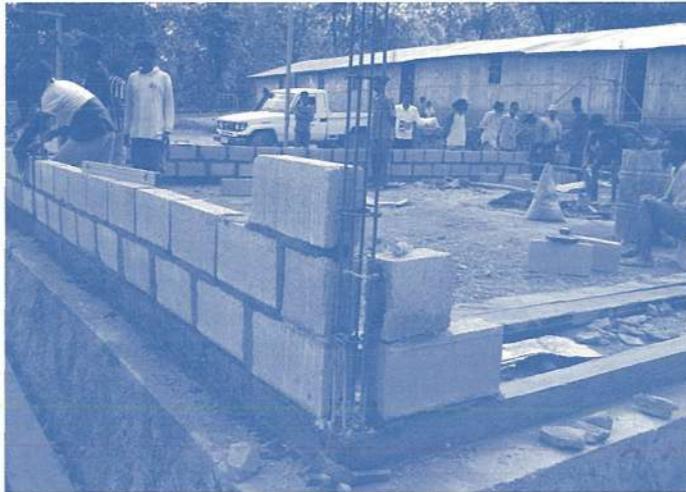


野菜の手入れをする住民

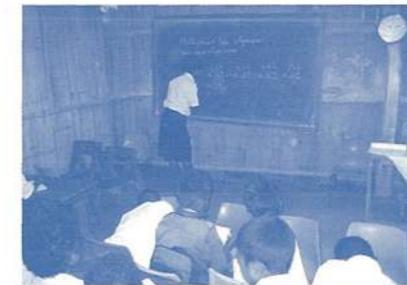
知つ  
いますか?

だれかとけんかをしてしまったとき、どうやって仲直りしていますか？ 東ティモールの伝統的な方法は、けんかした者同士が相手に贈り物を用意して「聖なる家」に行き、長老の前で贈り物を交換して地域の人々にごちそうを振る舞うというもの。「みんなの前でこのように仲直りました。過去のことは忘れましょう」という意味が込められているそうです。なんとも楽しそうな解決方法だと思いますか？

## オロパナ集落では小学校の教室増設



村人たちによる教室増築作業



手狭な従来の授業

レテフォホの村々にも小学校はありますが、とても充実しているとはいえない。オロパナ集落では、生徒数が増加し、学校の敷地内にあった集落長の事務所を教室として使用していました。PWJでは、三菱電機関連労働組合連合会の協力を得て、この学校の校舎増築を進めています。

資材はPWJが提供しますが、工事は村人たち。畠仕事やコーヒーの収穫準備の合間に縫って、ブロックを積んだり、セメントをこねたりしています。自分の建てた教室で子どもたちが勉強する風景を思い浮かべているのでしょうか。このニュースレターが完成するころには、新しい教室で子どもたちが元気よく手を挙げたりしているかもしれません。

## ワークショップで「平和」を考える

昨年春の騒乱以降、PWJはジャパン・プラットフォーム、国際平和協力センター（IPAC）と協力して、首都ディリ市などで国内避難民の支援を続けています。その柱の一つが対話と和解の促進。今年6月からは、青少年向けの平和教育・紛争解決のワークショップ（研修会）を東ティモールYMCAとも連携して開いています。8回シリーズで、何が暴力を助長したり抑えたりするのか、個人がそれぞれの立場から平和構築にどう貢献できるか、などを学びます。教材は神戸大大学院のロニー・アレキサンダー教授が書いた「ボーボキ、平和って、なに色？」（インドネシア語版）。主人公の猫ボーボキの素朴な質問を手がかりに、参加者に平和の意味を伝えています。



多くの人が参加した

## 村に生きる 東ティモール発

### 「組合に加わり地域の未来を考えるようになった」と話すミゲール・バボさん

「昨年の騒乱のとき、手元にはわずかのお金しかなく、その先が心配でした。でも、おいしいコーヒーをつくるために働き続けました」

妻と6人の子と暮らすバボさんは2004年、コーヒー生産者組合「カフェ・タタマイラウ」に加わった。以前は華僑系の企業などに、1キロあたり約0.6～0.7米ドル（約70～80円）でコーヒーのパーチメント（果肉を落として発酵させ、洗浄後に乾燥させた状態の豆）を買い取ってもらっていた。組合に入って、品質向上のために、熟した実だけを使うことや不良豆を取り除くこと、収穫してすぐに果肉を落とすことを学んだ。結果、買い取り価格は倍以上になりました、「昨年はキロあたり1.4ドル（約170円）。さらに組合資金としてキロあたり1.37ドルが支払われ、組合を通じた資金の貸し付けなどで生活を支えられるようになった」。

1999年、圧倒的多数の住民が東ティモール独立の意志を表明した住民投票後の混乱では、家を失った。

「比較的被害の少なかった私たちの村でも、インドネシアの民兵によって住民4人が殺されました。友人の家族は言いがかりをつけられて刑務所に連行されました。そのときは、今も詳しく話したくはありません」

それから8年。コーヒーの買い取り価格は上がっても、生活に余裕はない。それでも「私の妻は女性グループの活動などにも参加し、一緒にこの地域の未来を考え始めるようになりました」。コーヒーを通じた組合活動が未来への希望なのだ。



コーヒー生産に未来を託すバボさん

## 牛丼「すき家」で東ティモールコーヒー

東ティモール産のコーヒーは、

無農薬のフェアトレード商品「ピースコーヒー」としてPWJがオンラインショップなどで販売しています。その活用が大きく広がっています。ゼンショーターが運営する牛丼チェーン「すき家」は全国約



850（6月現在）の全店舗で東ティモール産コーヒーのドリップバッグを販売し、うち約240の店舗ではドリンクメニューとしても提供。販売量の拡大を通じて東ティモールの生産者の生活向上に役立ち、フェアトレードに対する認知と共感の拡大にもつながっています。

## PWJの活動にご協力ください

### ◆「すべての人に水を～ピースウォーターキャンペーン」

PWJでは2007年、世界各地で、水を重視した支援活動を進めています。PWJの活動に、ご協力をお願いします。

詳しくはホームページまたはお電話0120-252-176（通話料無料）で。

### <郵便振替>

口座番号：00160-3-179641

加入者名：ピース ウィンズ・ジャパン

※特定の地域・活動へのご支援の場合は、通信欄に明記してください。

### <銀行口座>

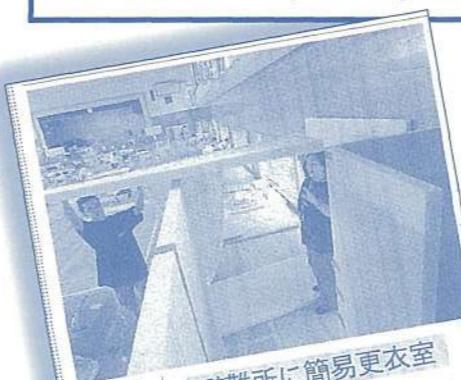
・ピースウォーターキャンペーンなどPWJの活動全般へのご支援

銀行名：三井住友銀行青山支店

口座番号：普通 1671932

口座名義：特定非営利活動法人 ピース ウィンズ・ジャパン広報部

<ホームページ> <http://www.peace-winds.org/>



## メディア 掲載報告

日本経済新聞7月20日付夕刊社会面で、PWJが新潟県中越沖地震の支援活動の一環として、柏崎市の松浜中学校避難所に設置した更衣室のことが報道されました。「これまで体でタオルをまいたり、体育館の2階で着替えていて不便だった」といった被災者の感想も紹介されています。

## 支援者サービスの窓

PWJは2007年、「すべての人に水を～ピースウォーターキャンペーン」として、世界各地で水を重視した支援活動を進めています。PWJ以外でも最近、水の問題に焦点が当たられることが増えています。

たとえば、そのときどきの世界の問題を指摘し、高い評価を得ている「人間開発報告書2006」（国連開発計画=UNDP=発行）のテーマは「水危機神話を越えて：水資源をめぐる権力闘争と貧困、グローバルな課題」。水危機は国を疲弊させる一方、水問題に積極的に取り組んでいる国ほど、保健衛生や貧困などの問題の解決が進んでいるといわれています。

日本は水そのものの不足はありませんが、1年間に輸入している食糧などをつくるために必要な水の量（パチャルウォーター）は、途上国に住む12億人（！）の水使用量になるそうです。水危機は他国の問題ではありません。